

# 博士学位論文審査要旨

2020年1月14日

論文題目： 近代日本における徳富蘆花文学のメディア的展開

学位申請者： 平石 岳

審査委員：

主 査： 文学研究科 教授 西川 貴子

副 査： 文学研究科 教授 田中 励儀

副 査： 文学部 教授 瀬崎 圭二

要 旨：

本論文は、徳富蘆花の文学を多様なメディアとの関係から考察し、蘆花がメディアに対して取った方法や、受容の様相、さらには蘆花の手を離れた再創造のあり方を明らかにしたものである。

第Ⅰ部「〈話題〉のなかの小説——社員作家の方法」では民友社社員作家期の蘆花の小説を取り上げ、発表紙誌を意識しながら、同時代の報道や風潮（〈話題〉）を巧みに取り入れた蘆花の方法を検討した。第一章では、発表雑誌で唱えられた「主婦」のあり方とは異なる小説内の女性たちの生き方に、メディアに迎合しない蘆花の方法を見出した。第二章では、「申し子」をめぐる話型を下地に、日本洋画壇で〈話題〉となっていた〈風景〉の描き方を取り入れた小説として、「漁師の娘」の意義を明らかにした。明治期の〈風景〉描写を考える上で重要な視座を与える論である。第三章では、小説「灰燼」を分析し、本作に、掲載紙『国民新聞』の西郷隆盛の取り上げ方を問い直す蘆花の企図を見る。第四章では、当時〈話題〉となっていた鉄道事故と「白痴教育」を取り入れ、「白痴」を他者が意味づけることの不穏さを示した小説として「除夜物語」を評価した。

第Ⅱ部「わたしたちの〈蘆花〉——受容と再創造の諸相」では、後年の代表作とされる小説やテキストの受容および再創造・再編成のあり方を豊富な資料とともに明らかにした。第五章では、小説「思出の記」に自伝形式が採用されたことの意味を読者の受容と関わらせて読み解き、第六章では、小説「黒潮」が演劇化される中で傍筋の物語に重点が置かれるようになった状況を調査し、第七章では小説「不如帰」の昭和二年の上演を取り上げ、軍人という職業ゆえに苦しむ男たちの物語というサブテーマが浮上していることを指摘した。いずれも新見である。第八章では、蘆花没後の全集の企画、版權獲得の動き、著作権継承者・愛子の動向を調査し、テキストの編集、校訂、刊行、流通に関する現象を分析した。丹念に調査されており資料的な価値も高い。

本論文は、徳富蘆花の小説および周辺資料、受容状況について丁寧に調査し分析したものであり、説得力がある。第一章、第四章で作品の位置づけにやや曖昧な部分も残すが、しかし従来にない意欲的な論となっており、論文全体として新見が多く、徳富蘆花研究に一石を投じる、水準が高いものとなっている。よって、本論文は、博士（国文学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

## 総合試験結果の要旨

2020年1月14日

論文題目： 近代日本における徳富蘆花文学のメディア的展開

学位申請者： 平石 岳

審査委員：

主 査： 文学研究科 教授 西川 貴子

副 査： 文学研究科 教授 田中 励儀

副 査： 文 学 部 教授 瀬崎 圭二

要 旨：

上記審査委員3名は、2020年1月8日午後6時30分から約2時間にわたり、徳照館第二共同利用室において、公開で学位申請者に対して、口頭試問を行った。

学位申請者は、審査委員からの質疑に対して、提出論文についての専門的知識はもとより、関連する諸分野の問題についても、的確かつ詳細な応答を行った。その結果、本論文の学術的価値の高さ、および学力水準の高さが確認された。

また、外国語（英語）については、口頭試問にひきつづき、本論文の内容に関わる英語資料についての語学試験を行い、十分な学力のあることが確認された。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

## 博士學位論文要旨

論文題目： 近代日本における徳富蘆花文学のメディア的展開  
氏名： 平石 岳

### 要 旨：

本論文は、蘆花徳富健次郎の文学を、近代日本の多様なメディア・表現媒体との関係から考察したものである。徳富蘆花が明治 30 年代に流行作家となり、国語読本・教科書に多くの作品が掲載され、昭和 30 年代ごろまで「蘆花文学」が様々な形で受容されていたことについては、数多くの証言がある。しかし近年、蘆花の多くの作品はほとんど読者を獲得できておらず、また限られた作品に調査・研究が集中し、蘆花という作家、あるいはその文学の包括的検討が行われていないという概括がなされている。

近年の近代文学研究において、研究される作家に偏りが生じていることは度々指摘されている。しかし、蘆花のような作家とその文学を研究することは、むしろ近代日本という時代を捉えるための欠かせない視座を与えてくれるはずである。なぜ「蘆花文学」がかつて多くの読者を獲得し、そして近年読まれなくなってしまったのか。ここから本論文は、蘆花作品が執筆発表され、流通していくメディアの特質や、受容されたそれぞれの時代と強く結びついていたのではないかという推論を立てた。近代日本において様々に広がっていき、時に作者蘆花の手から離れていく「蘆花文学」のメディア的展開を検討することは、限定された時代に行われ、生じていた、文学の方法や想像力を突きとめる手立てになると考えた。

本論文は二部構成から成る。まず第 I 部「〈話題〉のなかの小説——社員作家の方法」では、民友社社員作家期における、蘆花の短編小説に注目した。明治 22 年に実兄徳富蘇峰の主宰する民友社に入社し、翻訳や小欄執筆に従事する蘆花の社員時代の文筆活動は、これまで長編小説や紀行文・美文を中心に検討されてきた。しかしこの雌伏の時代に、蘆花は好むと好まざるとにかかわらず、民友社系メディアに向き合い続け、そのなかで文学の方法について熟考し試みを重ねていた。そこで第 I 部は、『国民新聞』『家庭雑誌』に発表された短編小説を取り上げ、同時代の報道や風潮を巧みに取り入れながら、発表紙誌を意識した蘆花の方法や作品のテーマを検討した。メディアによって様々な伝えられるそれぞれの時代の〈話題〉のなかで、蘆花はどのような形で社会と接点を持ち、小説を書いていったのかを考察した。

第一章では、蘆花が多くの記事を執筆した『家庭雑誌』のなかから、研究史でもほぼ黙殺されてきた「砂上の文字」「夏の月」の二作品を取り上げた。この二作品では、ともに「家庭（ホーム）」を築いていない女性が自身の過去を語っている。しかしそれぞれの語り手は、満たされた「家庭」を築けないことを単に嘆いていない。むしろその「家庭」における女性の役割に縛られず、「家庭」を築けないという欠落のままに生きようとする意志をその語りのなかに込めていた。このような分析から、『家庭雑誌』で唱えられた「主婦」と病の関係などの〈話題〉を取り入れながらも、そのメディアの論調や報道姿勢に収斂することのない、後年の蘆花の作家的特質が見出せる物語でもあったことを明らかにした。

第二章では、『家庭雑誌』に掲載された「漁師の娘」を取り上げ、作中の〈風景〉の描き方が、当時の日本洋画壇で〈話題〉となっていた外光派・白馬会の方法と呼応した部分があることを指摘した。蘆花が当時写生に熱中したことを確認したうえで、「申し子」として登場する娘・お光の持つ特異性を、他の人々とは異なる〈風景〉への視線だと分析し、改稿箇所を挙げながらその方法を検討した。

第三章では、『国民新聞』に掲載された「灰燼」作中の〈西郷隆盛〉の機能を、西南戦争終結以

降に数多く出版された戦記類などとの比較から検討した。作中では、〈西郷〉を「疫病神」「福神様」と相反する呼称で呼ぶ村人、〈西郷〉への情熱を唱えながら故郷に逃げ帰る青年、私欲のために〈西郷〉を利用する人物などが描かれている。同時代における、上野公園西郷隆盛像落成への反応、『国民新聞』における〈西郷〉の語られ方なども参照しながら、自らの思惑・欲望を〈西郷〉に託してしまうような同時代的な風潮を蘆花が見取り、作品の方法として用いた可能性を指摘した。

第四章では、『国民新聞』に掲載された「除夜物語」を取り上げ、作中舞台となっている信州への取材旅行とその成果をまず確認した。加えて、作中の鉄道事故の危機が、いまだ世間の〈話題〉となっていた篤川鉄橋汽車転落事故を想起させるものであることを指摘し、当時過剰とも思える献身的態度が踏切番という職業に求められていたことを明らかにした。そのうえで、酒飲みの踏切番と「白痴」少年の交情を描いた「除夜物語」が、当時のキリスト者による「白痴教育」の紹介・言説を語りに取り込みながら、「白痴」をそのような文脈で理解し、語ってしまおうとする〈物語〉の欲望の現場を描いた作品だと分析した。

このような検討を通して、社員作家期の蘆花の短編小説が、同時代で取り沙汰されている〈話題〉を取り込みながら、時に発表紙誌の性格・主張をも照射するような方法を用いていたことがわかった。その際、発表媒体を考慮して、改稿を積極的に行う蘆花の作家的態度も明らかにすることができた。また、このような検討の過程で、明治30年代後半から大正期の作家的評価を参照すると、蘆花が「政治小説」や「立志小説」の書き手であり、「真面目」な作家としても言及されることが多いことがわかった。しかしこのような蘆花評価は大正後期からは激減し、〈通俗〉という評価、作家イメージが大半を占めるようになる。

そこで本論文では、第Ⅱ部「わたしたちの〈蘆花〉——受容と再創造の諸相」にて、蘆花の〈通俗〉という評価、イメージが広まっていくなかで、後年「代表作」として挙げられていく長編小説や蘆花テキストが、二次的創作や出版システムにおいて、いかに再創造・再編成され人々に届けられていたのかを調査した。

第五章では、後年に作者蘆花の自伝的作品として主に読まれていく「思出の記」を、『国民新聞』に掲載された読者からの投書や同時代評を補助線として検討した。作中の「僕」（菊池慎太郎）が、過去の自身を典型的な「青年」だったと語り、しきりに「凡人」と自己規定することを、同時代の〈偉人伝〉ブームとの関係から考察すると、これまで見過ごされてきた作品の方法や、かつてあった読者たちの読みが明らかになった。さらに、新聞連載時の表現や単行本化に際しての改稿、エピグラフなどに注目することで作品の成立過程を窺いながらも、蘆花がその執筆過程で、「僕」の物語において何が重要なのかを見定めようとしていく痕跡も浮かび上がらせた。

第六章では、当時の文壇において求められていた「政治小説」として、徳富兄弟がつくりあげた「黒潮」が、メディアミックスにおいてどのように変容していったのかを調査した。「不如帰」のヒット後に新派劇化された「黒潮」の物語は、メロドラマ的な原作の「傍筋」を中心にして構成され、独自の展開も設けられた。この構成は以降の「黒潮」群におけるフォーマットとなり、そこには作り手の思惑や、当時の流行が色濃く投影されていたが、それは同時に「政治小説」としての原作への期待感や作品の可能性を失わせてもいた。「黒潮」のメディアミックスは、蘆花という作家がどのように求められていたのかを示しており、特定の作家の名を冠した物語へ、人々がどのような欲望を向けるのかをあらわしたのもであった。

第七章では、蘆花の死（昭和2年9月）から約一年後に脚色上演された、川村花菱脚本「不如帰」劇を取り上げた。新派の一大興行として上演されたこの「不如帰」劇は、それまで広く流通していた原作や柳川春葉版とは大きく異なる展開が設けられていた。特に、片岡中将と千々岩という二人の軍人に新たな解釈が行われ物語が再構築されており、花菱は、軍人という職業ゆえに苦む男たち、というサブテーマを物語に書き込んでいた。それは、軍人の品性を問う当時の風潮とも連動しており、作者の手を離れた物語が特定の時代と結び付き、再創造された現象として

も特徴的なものだった。

第八章では、蘆花の死から昭和10年代にかけて、蘆花をめぐる様々なテキストの編集、校訂、宣伝、刊行、流通に際して、どのような動きや現象があったのかを、テキストをめぐる〈権利〉を中心に考察した。没後全集『蘆花全集』やその後の岩波書店版における、版權獲得の動きや商業戦略には、円本時代の論理が強く働いていたことがわかった。しかしそのなかで、著作権継承者となった遺妻・愛子の動向に注目すると、自らを中心に据えた読者共同体を志向したり、商業ベースでは顧みられなくなっていくような蘆花テキストの〈正しさ〉を求めていったりしたことも見えてきた。

最後に「附録」として、「蘆花原作劇上演年表（明治三五年～昭和二〇年）」を作成した。これは特に第六、七章の立論の補完的役割を果たすとともに、「蘆花文学」の広がり俯瞰するための効果的な資料となっている。

以上のように本論文では、民友社という所属組織・グループとの関係性から、あるいは作家がコントロールしていないところからも「蘆花文学」がつくりだされていたことを明らかにした。そこには、近代日本の文学・文化をめぐる様々なメディアのなかで、特定の〈作者〉がいかにか形成されていったのか、その力学を見取ることもできた。多くの作品が現代において読まれていないように、「蘆花文学」は多くの読者（そしてそれを基盤に生成される研究者）を獲得できるような、普遍性をほとんど持つことができなかった。しかし「蘆花文学」には、現代からは窺い知れない文学をめぐる想像力の履歴が刻印されていたのである。本論文は、近代日本という時代を捉えるために、その履歴の一部を提出したものである。